

北海道美幌町教育委員会

地元のアスリートを育む 支援プログラム

～地元オリンピックが未来に繋ぐ～

はじめに

平成 25 年9月8日の未明「TOKYO 2020」とテレビに映し出され、「トウキョー」とコールされた瞬間、日本国中が歓喜に沸いた。それから6年余りが経ち、まさか開催が延期となろうとはその時は誰も想像していなかったであろう。日本のみならず世界の多くの人々が、ウイルスの猛威に翻弄され、行動が制限されるなど、当たり前の生活さえできず、未だ終息の見通しが見えない状況が続いている。

それは、世界を目指すアスリート達にも同様に、大きな不安の中、無事にオリンピック・パラリンピックが開催されることを願いつつ、希望を持ちながら努力を続けている。

ひたむきに努力を積み重ね、世界で活躍するアスリートらは、世界の多くの人々に夢と感動を与え、東京オリンピック・パラリンピックの開催が日本にとっても世界中の人々にも元気と勇気をもたらえるものと期待している。

美幌町教育委員会では、そのオリンピック・パラリンピックの開催を契機とし、これまで日本代表選手を数多く輩出する中、将来につながる子供達の育成と支援を積極的にすすめていく取り組みを紹介します。

1. 地域に根付く活動基盤と選手の育成

(1) 本町のスポーツ活動の現況

美幌町は、古くからスポーツが盛んな町で、現在も子供から大人まで多くの町民がスポーツに親しんでいる。

この背景には、様々な歴史的要因があると思われるが、現在の環境を作り出した大きな要因にはスポーツ協会（旧

○美幌町出身のオリンピック出場選手

選手名（競技種目）	出場大会（開催年）
柴田 敬士 （バイアスロン）	レイクプラシッド（1980）
阿部 由香里 （バイアスロン）	長野（1998）
石田 正子 （クロスカントリースキー）	トリノ（2006） バンクーバー（2010） ソチ（2014） 平昌（2018）
佃 咲江 （自転車トラック）	北京（2008）
鈴木（三橋）李奈 （バイアスロン）	ソチ（2014） 平昌（2018）
藤村 祥子 （スピードスケート）	ソチ（2014）
一戸 誠太郎 （スピードスケート）	平昌（2018）

○美幌町のパラリンピック出場選手

選手名（競技種目）	出場大会（開催年）
久保 恒造 （クロスカントリースキー・ バイアスロン）	バンクーバー（2010）、 ソチ（2014）銅メダル獲得
久保 恒造 （陸上）	リオデジャネイロ（2016） 東京（2021）出場予定

体育協会）と育成団体であるスポーツ少年団の存在がある。

スポーツ少年団は本部が設立された昭和 53 年当時、6 団体 166 名の団員が登録されていましたが、その数は年々増加し、令和元年度は 18 団体 469 名が団員登録され、

小学生に至っては総児童数 862 人に対する加入率はほぼ半数（47.7%、「全国平均 H30 年度 9.09%」）と高い割合となっている。また、中学校の部活動においても、スポーツ少年団からの流れから、運動部への加入率は全校生徒の 6割を超えており、本町における青少年の育成・教育にスポーツが大きく貢献していることが解る。

また、これらの風土や環境から本町は人口2万人弱の小さな町でありながら、多種目において全道・全国・世界レベルで活躍する選手が数多く輩出されており、夏季・冬季の双方で本町出身のアスリートがオリンピック（7名延べ 10 名）とパラリンピック（1名延べ2名）に出場を果たすなど、誇るべき成績を残してきている。

今年の東京パラリンピックにも車いす陸上のトラック競技で、久保恒造選手の出場が内定し活躍が期待されている。

(2) 本町のスポーツ活動における課題

スポーツ活動の維持・発展にとって、欠かせないものはスポーツ指導者の存在である。

本町のスポーツ少年団の指導者は、そのほとんどがボランティアで指導にあたり活動を続けてきている現状があり、活動備品等の購入や遠征費の負担など、指導者が抱える負担は少なくない。

また、子供達のスポーツ活動に係る保護者の負担も大きく、経済的・時間的な負担から少年団活動などに参加できない子もいるのが事実である。

こうしたことからスポーツ活動に係る指導者や保護者の金銭的な負担の軽減を図るとともに、次世代を担う若い指導者とトップアスリートを夢見る子供達を育成・支援していくことが今後の課題であると考えられる。

(3) 課題解決に対する取り組み

今年開催される 2020 東京オリンピック・パラリンピック更には、2030 年に誘致を目指している札幌冬季大会を契機として、将来のトップアスリートを目指し本町でスポーツに励んでいる子供達を応援するプロジェクトを実施することにより、全町民に対し、美幌町は「頑張る君たちを応援している」というメッセージを届け、地域愛の醸成と町民満足度の向上に寄与するものであり、さらなる本町のスポーツ振興と切れ目ない子育て環境の整備により、「スポーツを通じた地方創生」を推進していくこととした。

2. 具体的な取り組み内容

令和2年度の新規事業として「美幌町未来のアスリート応援プログラム」を事業化し、既存事業と併せ総事業費 12,758 千円を計上し、実施するところであったが、早々に東京オリンピック・パラリンピックの延期が決定し、また、コロナ禍の影響により、事業や競技大会が相次ぐ延期又は中止の決定により、選手・団体の活動自体が停滞するのではないかと危惧された。

そうした中においても、個々に活動を継続し、感染防止対策を講じながら競技会の開催やスポーツ活動を続けている指導者・選手、そして保護者の方々を少しでも支援していくことができたものと考えている。

具体的に計画していた内容としては、次のとおりである。

- | | |
|--|----------|
| ① スポーツイベント：日本選手メダル獲得数クイズ等（町民対象） | 100 千円 |
| ② オリンピック応援研修：サッカー・マラソン競技（主に青少年対象） | 2,000 千円 |
| ③ 育成強化選手奨励金制度の新設（12～19歳の地元の有望な選手） | 1,000 千円 |
| ④ スポーツ少年団活動用備品購入費補助事業：備品等購入費補助要綱の新設制定（14 団体） | 3,658 千円 |
| ⑤ 全国・全道競技大会選手派遣費補助金：補助率の改正による増額 | 5,000 千円 |
| ⑥ スポーツ指導者招聘事業：補助金増額 | 1,000 千円 |

上記の取り組みのうち、①、②、⑥はオリンピック・パラリンピックの延期や事業の中止により、未実施となったが、美幌町独自の田子高齢者生活活動支援及び青少年スポーツ振興基金を活用した「育成強化選手奨励金制度」は、所属団体より推薦された本町（出身者含む）の 12 歳から 19 歳の有望な選手を町が育成強化選手に認定し、今後の活動を支援するための奨励金を年 2回に分け交付した。奨励金は全日本レベル（中央団体）や都道府県または管内競技団体による選考基準を満たし指定強化選手に認定された選手で JOC などの認定は 20 万円、中央団体 10 万円、都道府県団体 5万円、管内競技団体 3万円とし、令和2年度は、12 名に計 73 万円の奨励金を交付した。



育成強化選手奨励金交付式(令和3年3月24日)

また、「スポーツ少年団活動備品購入費補助」では、町に対し青少年の育成に役立ててほしいと受けた寄附を財源として事前に意向調査を行い、備品購入を希望する14団体に補助し、スポーツ活動に必要な練習器具や貸出用の道具など有効に活用することができ、スポーツ少年団活動の充実につながった。

令和3年度には「未来のアスリート応援プログラム」事業の新たな取り組みとして、地元出身の現役選手と将来の活躍を夢見る子供達や選手を支える保護者に対して、直接トップアスリートと交流し、世界で戦う中でのこれまでの体験談や身近な存在である親近感を感じてもらえるようオリンピックとのトークセッションなどを計画している。

[令和3年度新規の取組]

- ・トップアスリート招聘事業（美幌町出身のトップアスリート交流イベント） 100千円

また、指導者の育成と資質向上のため、公益財団法人日本スポーツ協会公認指導者資格を受講するためのスポーツ指導者資格取得補助金を平成29年度に制度化し、主に若い指導者の育成を図っている。

3. 地元出身のオリンピックのキャリア形成

オリンピックや世界大会で輝かしい活躍の裏には日々の人並みならぬ努力があり、その中でも栄光を勝ち取る選手は一握りの選手で、その陰には惜しくも代表権を得られず悔しい思いをする選手も少なくはない。世界で活躍した選手もいずれ現役を引退し、セカンドキャリアをどのように進んでいくかも日本のスポーツ界において課題ともいえる。夢を実現でき

なかったとしても次代を担う世代に夢を託し、これまでスポーツで培った経験や知識を伝えていくことがスポーツの普及発展にとって大切で必要不可欠なことである。

2018年の平昌オリンピック冬季大会の日本代表選手選考会に2大会連続出場を目指し臨んだ美幌町出身のスピードスケート競技 藤村祥子選手は、前回のソチオリンピックにおいてスピードスケート女子5kmで10位という成績を残し、次の平昌オリンピック出場を最後という強い思いで選考レースに挑んでいた。しかし、強豪ひしめく厳しい戦いであった選考会で、日本代表の切符を勝ち得ることはできなかった。

同じくして選考会に挑んでいた美幌町出身の一戸誠太郎選手が初の日本代表に決まり、オリンピックでは好成績を残し、若い世代の活躍に今後の期待が膨らんだ。

平昌オリンピックが閉幕し、地元へ一時帰ってきた藤村選手は、今後の進む道をまだ迷っていたが、競技生活は終えるとの意思を固めていた。

これまでスケート競技で努力と経験を重ねてきた貴重な人材で、体育大学を卒業し体育を専門としてきており、地元の子供達や町民の方々に、その知識と経験を活かしてみないかと地元出身のオリンピックを専門職員として採用することとなった。

現在も美幌町教育委員会体育主事として、子供達のスピードスケートの普及はもとより、様々なスポーツ事業の指導や事業展開に活躍しており、地元から世界に羽ばたいた選手が、これからの未来に夢を抱く子供達に更なる夢の実現に希望を繋いでいってくれることを期待している。

美幌町はそうした人材の育成活用として、昭和53年度から教育委員会が社会体育担当の専門職員を「体育主事」として発令し、体育専門分野を担い、スポーツ行政を推し進めているのも独自の政策であるといえる。



地元出身のオリンピック藤村体育主事の指導の様子

おわりに

い子育て環境の整備により、「スポーツを通じた地方創生」を目指していこうとするものである。

平成 27 年 10 月にスポーツ庁が設置され、平成 29 年 3 月 24 日文部科学省策定の「スポーツ基本計画」策定に基づき、北海道では、「第 2 期スポーツ基本計画」を策定し様々なスポーツ政策に取り組んでいる。

スポーツ基本計画の取り組む施策として『スポーツを「する」「みる」「ささえる」スポーツ参画人口とそのための人材育成・場の充実』とあり、本町もオリンピック選手の支援はもとより活動する環境整備はもちろんのこと、活動する人、応援する人、選手を指導または支援する方々に対して、これまでも行政支援を進めてきた。

その中で、地元からオリンピック選手が活躍していることは、町民にとってもスポーツに対する機運の高まりやスポーツ行政を推し進めるうえで追い風になったことは確かである。オリンピックに出場するだけでも素晴らしいことであるが、それだけで終わるのではなく、それを契機として、更にスポーツを普及振興していくかが大事であり、地域の特性を活かし様々な事業を展開していくことが必要である。

本町では 2010 年に総合型地域スポーツクラブが設立され 10 年が経過したが、現在も子供から高齢者まで 1,000 人余りの会員が登録され、様々なスポーツで活動を展開しており、スポーツ人口の拡大と成人のスポーツ実施率を増加させ、スポーツにおける町民満足度の向上に寄与している。

ここに至るまでにも、平成 25・26 年度に文部科学省委託事業として取り組ませていただいた「スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業」での取り組みが大きな成果としてあげられ、町民アンケートや大学・企業のスポーツ資源を活用した各種スポーツ事業の展開、関係団体や関係委員と有識者による「スポーツ政策研究協議会」は様々な視点で意見交換がなされ、将来の美幌町が将来に目指すスポーツ政策の指針となった。

それらを参考に、今後も課題を一つ一つ解決しながら、地元の子供達が元気にのびのびとスポーツ活動で個性を伸ばし、そこに関わる指導者や大人達が、やりがいを持ち、支えあい、さらに地域のコミュニティが活性化することを期待するとともに、今後独自のスポーツ推進計画策定に向け、施策に反映していきたいと考える。

今後も、少子高齢化の影響により人口減少が否めない地域の実情にあるが、更なる本町のスポーツ振興と切れ目な